社会への窓を開く－新聞と視野－

長野県新聞活用教育（ＮＩＥ）推進協議会長
信州大学学術研究院教育学系教授
松本　康

私は新聞が好きな子どもだった。1960 年代の家庭は新聞があることが普通で、昭和ひとけた生まれの父は毎日、朝食の前に新聞を広げて読んでいた。新聞を読む父は私にとっては当たり前の大人の姿だった。私が社会のできごとに興味を持つようになったのは小学校に入ってから。ビートルズ来日、ベトナム戦争、大学紛争、公害など、大きなできごとが起こっていた時代だった。４～５年生の頃、社会科を専門とする担任の先生は新聞を良く読む人で、社会の中で今どんな問題が起こっているか、ニュースを細かく解説してくれた。私は話を聞きながら、大きな窓が目の前でいくつも開かれてゆくような感覚を味わった。

高校１年の時、新聞委員会に入った。ワープロはなく、手書きの原稿を地元の新聞社に入稿して紙面を作ってもらっていた。日本のＮＩＥ運動も総文祭もない頃で、今のように新聞社が新聞の作り方を指導してくれる機会も、高校新聞コンクールもなかった。大学生になって宿舎生活が始まると、図書館で毎日、複数の新聞を読み比べていた。宿舎を出た３年の頃から自分で新聞を購読し、スクラップ帳を作るようになった。大学院生の頃、ある中高一貫校の中学校社会科（公民的分野）の非常勤講師になり、毎回冒頭の５分を使って、当番の生徒にニュースを発表させた。事前に用紙１枚に新聞記事を貼り付けてスクラップを作らせ、そこに必ず自分の感想を加えさせた。生徒たちはこの課題に面白がって取り組み、仲間の発表に熱心に耳を傾けた。彼らは最後の感想にこう書いていた。「この１年で読める記事の範囲が広がったのが収穫」「どんなニュースでも先生がコメントできることに驚いた」

社会科の生みの親の一人である上田薫（1920-2019）は、講演の中でたびたび「視野」について語っている。「視野が広いということは知識の量が多いということと同じではないんです。さまざまなことがらが，互いに位置づいていることです。」「自分の専門、いわばホームで強いことは当たり前ですが、問題はアウェイでも戦うことができるかです。」

苦手な分野の知識が少なくとも、そのことがらが他とどのような関係にあるのかが視野の中に収まっていれば、おおよその判断を間違うことはない。私が小学生の頃に感じた、窓が開かれる感覚は、視野が広がる感覚だったのだ。今振り返れば、私の視野は新聞を読む大人の話を聞くことや、自分で新聞を読む習慣の中で、少しずつ広がってきた。

本年度で勤務校を退職する。2014 年度から 11 年間、推進協議会の会長を務めさせていただいたが、今年が最後となった。わずかながらも貢献できただろうか。お世話になったＮＩＥ推進協議会の皆さん、研究指定校の先生方に、心から感謝とお礼を申し上げたい。